

情報の論理的な「習得」から「活用(構成・発信・交流)」への授業システム — 説明文「未来をひらく微生物」(中学1年・光村図書) を例に —

佐藤洋一* 石田浩一**

*教職実践講座

**愛知県安城市立安城西中学校・国語科

A Model, How to Develop a Class, For Logical Acquisition of some Information and Making the Best Use of it. (its Arrangement Presentation, Interchange and Evaluation) — For Example, an Essay, “Microbes will Open our Future”, Mitsumura Toshio, for First-year Students in Junior High School —

Yoichi SATO* and Koichi ISHIDA**

*Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Anjo Nishi Junior High School, Anjo 446-0052, Japan

1 新学習指導要領と「習得・活用」の学力 — 求められる言語力・授業システム —

(1) 戦後教育観・授業観からの脱皮と改革

戦後約60年ぶりに改正された教育基本法を受けた「学校教育法」等の教育法案の改正により、これまでの学校カリキュラム開発と評価、各教科・道徳教育・特別活動等の全体像や枠組みの改革が、実践的な授業システム・方法とともに求められている^(1, 2)。

特に、全教科・領域・活動の中核となる「言語活動の充実—系統的な言語力育成・楽しく必然性のある学習(体験)活動との関係—」、思考力・判断力・表現力等への「活用」学力、論理的な記述やレポート作成技術・説明・要約・引用等の重視は、戦後以降の国語科授業(広義の言語教育)と評価のありかた、教育観・学習者観・授業観・評価観等の修正が求められているとすることができる^(3, 4)。

例えば、新学習指導要領では「基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ」(「総則第1」)、「指導の過程や成果を評価し、指導の改善を学習意欲に生かす」(「総則第4の(11)」)ことが、思考力・判断力・表現力等への「活用」学力とともに重視されている。

(2) 授業力, 三つの実践課題

ここには一つには「子ども中心主義」「学習者主体尊重的学習構想」の理念の陰で、教師は教えるべきことをためらい、結果として基礎・基本学力が全員に身に

ついていないにも関わらず表層的な、一部の子どもによる「学び合い・交流」等が漠然と行われてきたことの批判的提言を読むことができる。

二つ目には、習得・活用・探究という用語による指導過程(単元構想)論・教育課程開発と評価への提案は「国語科も含めた各教科の基礎・基本学力(習得)とは何か」「習得した知識・技能を活用できるとはどのようなことか」を明確に示すことが求められていると読むことができる。

三つ目には、到達目標(評価規準・基準)観からの指導過程の再構築・学びのプロセスを重視した授業構想が、学習者にとっての学びの意欲化(生涯学習につながる主体的な学習習慣化)につながる解釈することができる^(5, 6)。

(3) 情報理解から論理的な記述力育成へ

このことは、全員に保証すべき「習得型の学力(基礎・基本学力)」「活用・探究型の学力(言語力と活動)」の明確化とともに、実践的な指導過程・学習段階の開発提案、そして児童生徒は「何をどう学び、どう身につけるべきなのか」「それは他教科や学習活動、家庭でのコミュニケーション、読書力等にどう一般化でき、自分らしい課題解決能力につながるのか」を、学習者個々に目に見えるように授業を構成することが求められているとすることができる。こうした「授業システムの開発と検証」の過程は同時に、教師自身の授業力検証・改善の観点にも反映してくる。

本稿は上記のような問題意識から中学校説明文を例にした、新学習指導要領（国語科）が求める教育課題への実践提案である。特に全国学力テスト（B問題）で生徒の得点率が低く、緊急な実践課題となっている「論理的記述力」の指導開発を^(7,8)、系統的な「読解力」育成との関連からとらえた授業システムの開発を行った。

「習得」段階で説明文からレポートに生かすことのできる「基本」を焦点化して全員に「定着」させた後、論理的な構成によるレポートを作成することで、生徒個々の立場や関心から情報を選択し再構成するステップを明確にすること等の提案である。

2 学び（言語力）の実態と課題

これまでの中学校国語科授業では、基礎・基本的な知識・技能の学習から、いきなり相互交流や伝え合い等の発展的な学習に展開することが多かった。限られた時間の中で様々な学習活動が行われ（生徒たちは習得すべき知識・技能が全員に、確かに定着しないままに）学習者まかせの関わり合いや話し合いの授業が行われてきた。

結果、一部の生徒が活躍するものの「多くの生徒が発表を聞けない」「メモすることもできない」「自分の意見をレポートに書くこともできないまま」ということすらあったのが実態である⁽⁹⁾。

説明文を、情報の「習得（読解）・活用力（構成・発信・交流）」学習の〈一モデル〉として示し、全員が豊かに活用できる学力を身につけられるように指導していく必要がある^(10,11)。

そのためには、説明文から生かすべき論理的な言語力のポイントを生徒の実態を考慮して焦点化すること、「到達目標（評価基準）」の系統性の観点から整理して、習得・活用力・振り返り等に展開できるように示す必要がある。

3 何のための国語科説明文指導か？

(1) 説明文教材を〈情報構成・発信の一モデル〉に詳細な読解を重視した学習では、教材内容については理解しても、学びが次の学習に生かされない、〈活用〉学力へと結びつかないという問題が起りやすい。

そこで、説明文教材を〈情報理解・構成・発信の一モデル〉としてとらえ、その中から〈活用〉へと結びつく「基本」を系統的に焦点化し〈習得〉すべき言語技術として生徒に定着させることが指導上重要である。

その上で、「自分の考え」を論理的に書く（まとめる）学習ステップを通して〈習得〉した「基礎・基本」を生徒個々の課題意識に応じて多面的に〈活用・展開〉させることができるようになる⁽¹²⁾。

(2) 「自分の考え」を書くステップを全員に

「話す・伝え合う」学習等でスピーチやディベートなどの「言語活動例」を行い、論理的に「話す・聞く」学習を行おうとしても、基礎・基本学力段階の定着を無視した学習では、系統性も見えない単なる活動に終わってしまう。生徒個々の課題意識や思考を明確化し、思考の過程を追いながら、評価・交流をするためには、論理的に「書く」段階が必要不可欠である⁽¹³⁾。

しかし、中学校現場でのいわゆる「書く」学習は長文の読書感想文や生活作文等が中心であり、論理的な文章は読解の対象となることは多いが、生徒に系統的に書かせる指導は小学校同様、極めて少なかった。

この背景には①生徒たちの気づきを待つ（学習者の主体性や意欲重視？）、②限られた時間のなかであれもこれもといった言語活動を行う（学力論・系統的指導観の欠落した安易な活動主義）、③「書く」学習を行う時間を確保できにくいという現場的な問題もある。こうしたことで結果的に、到達目標（評価規準・基準）が不明確・不確定になり、次の学習を見通した系統的な指導もできないばかりか、時間数も増えるばかりであった。生徒たちにとっても学習を通して身についた力が明確にならないという問題も抱えてきた。

(3) 論理的なレポート作成学習がポイントに

これを解決するためには論理的なレポート作成のために必要な力の系統的明確化、教師が教えるべきことは教えることが重要である。これにより、限られた学習時間のなかで〈習得〉すべき内容が明確化し、「書く」学習の時間を確保することにもつながってくる。

さらに、教師が指導・評価すべきポイントの一つは、他の教科・活動、読書力等にも発展していく論理的な言語能力が、個々に選んだテーマによって書かれたレポートの中に、どのように定着しているか生徒個々に自覚させ応用できるようにすることである。

生徒にとっても、他の生徒のレポートを「読む」ことで学習した共通の観点をもとに、評価・交流でき、学びの反復・確認ができるようになるはずである⁽¹⁴⁾。

4 教材の特質を生かす主な視点 —「未来をひらく微生物」を例に—

本稿で取り上げた説明文「未来をひらく微生物」（光村図書、中学1年生）は、生命科学者である大島泰朗氏が環境問題の解決策の一つとして、人間が昔から活用してきた「微生物」の力を利用することを述べたものであり、教科書書き下ろし教材である⁽¹⁵⁻¹⁷⁾。

(1) “微生物”が地球環境の未来をひらく？

微生物と環境問題を結びつける着眼点（省略）

(2) 四つの意味段落（構成）と文章構造

①「論理的な構成の型」からの読みとり

はじめ1 1段落 「微生物の定義」

はじめ2 2・3段落 「微生物の食品への利用」

はじめ3	4段落	「微生物の役割」
はじめ4	5段落	「なかの具体例の予告」
なか1	6～12段落	「微生物を利用した環境問題を起こさない製品を作る例（具体例1）」
なか2	13～16段落	「汚染された環境を微生物の力で元の状態に戻す例（具体例2）」
まとめ	17段落	「環境問題の解決には、掃除の役割を果たす微生物を活用する必要がある（筆者の考察）」
むすび	18段落	「微生物は、豊かで安全な社会を作るための未来をひらく技術を教えてくれる（筆者の主張）」

②論理的な構成モデルという点の課題

冒頭「はじめ」と「なか」の意味段落構成、解釈でやや意見がわかる。本実践では微生物について定義される①段落、微生物の食品への利用について述べられている②・③段落、自然の中での役割について述べられている④段落、この文章の重要な話題となる「環境問題」について提示される⑤段落を「『なか』の予告」ととらえ、⑤段落までを「はじめ」としてレポート作成のモデル化に展開させた。

（3）論理的レポート作成のモデル学習化—活用—

中学校で扱う説明文教材は、生徒が書く時の論理的な手本となるべき4段落構成（はじめ・なか・まとめ・むすび）のズレ、内容や論理展開の曖昧さ等で「レポート作成の基本モデル（構成・キーワード・テーマ・分量・タイトル等）」的な教材は実際は少ない。

本教材でも生分解性プラスチックやバイオエタノールがそれほどまで普及はしていない現実や「腐敗」についての言及がないこと等問題をかかえているが、「はじめ・なか・まとめ・むすび」の文章構成、「考察・まとめ」と「具体例と展開・なか」の関係、具体例選択と構成・提示の工夫、個性的な筆者の主張や問題意識、資料の選択など、レポートを書くにあたって生徒に応用させることのできる観点が数多い。

これらの情報を正確に読み解く「読み方」を、学習シートを使いながら〈理解から構成・発信モデル学習〉を行い、論理的に「書く」ことへとつなげることが有効である。

情報の「習得（読解）・活用力（構成・発信・交流）」学習の〈一モデル〉としたことで、苦手だった説明文に興味をもつことができた生徒がいた。

（4）その他の特質（詳細は省略）

- ①「情報の熟考・評価」に適したテーマ性。
- ②主張にあった「具体例」の数と内容の構成力。
- ③わかりやすい説明の仕方や表現の工夫。
- ④非言語情報・資料の選択と効果的活用力。

5 情報を読み解く・書く学力の重視—授業の到達目標（評価）の明確化—

（1）学習目標

- ①説明文を正確に、豊かに読み解くことができる。
- ②調べたことを論理的な構成にまとめ、発信・交流することができる。

（2）評価基準のポイント

以下の7点が説明的文章の読み方の評価基準のポイント、①～④までが「習得型学力」、④～⑦までが「活用型学力」のポイントである。

- ①教材文の正確な読み取り **〈情報の正確な理解〉**
- ②「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」のまとめりと内容を理解し、全体の論理的な構成を理解することができる。 **〈論理的な構成の基本〉**
- ③筆者の主張と根拠となる事実等に着目し説得力のある説明の仕方を理解することができる。

〈論理的に読み解く—論理の一貫性、説得力—〉

- ④情報を正確に理解した上で「自分の考え」を批判的に広げることができる。 **〈情報の熟考・評価〉**
- ⑤文章と写真・イラスト・統計等の資料を効果的に組み合わせることができる。 **〈資料活用の技術〉**
- ⑥知的好奇心をもって本を読み積極的にインターネットを活用して、初めて知った情報とそれに対する考えを論理的な構成でまとめられる。

〈自分の立場・関心、読書から情報の発信へ〉

- ⑦レポート交流会を通して情報発信を行い、級友のレポートに対して質問をし、着眼点・構成、発表技術の個性等について評価し合うことができる。

〈情報の豊かな発信と交流〉

（3）情報を論理的に読み解く・発信する技術

学級の全員が論理的に読み解くことができるようになるには時間がかかる。生徒自身が課題を設定し自由に話し合う学習では学力は身につかず、読む学習を書いたり話したりする活動に応用させることも難しい。教材をモデルとして文章構成について検討することで、読み解く学習で学んだ論理的な構成や資料活用・説得力の方法等を生かして、効果的な情報発信を行うことができる⁽¹⁸⁾。

（4）非言語情報・資料の選択・活用力

—写真・イラスト・統計資料・グラフ等—⁽¹⁹⁾

必要とする資料（非連続テキスト）を選択し、自分の情報発信のために生かすことがこれからの社会生活では必要となる。

本実践での、文章にあった資料を選択する学習は、情報を豊かに発信するために資料を活用する技術を身につけることをねらいとしている。

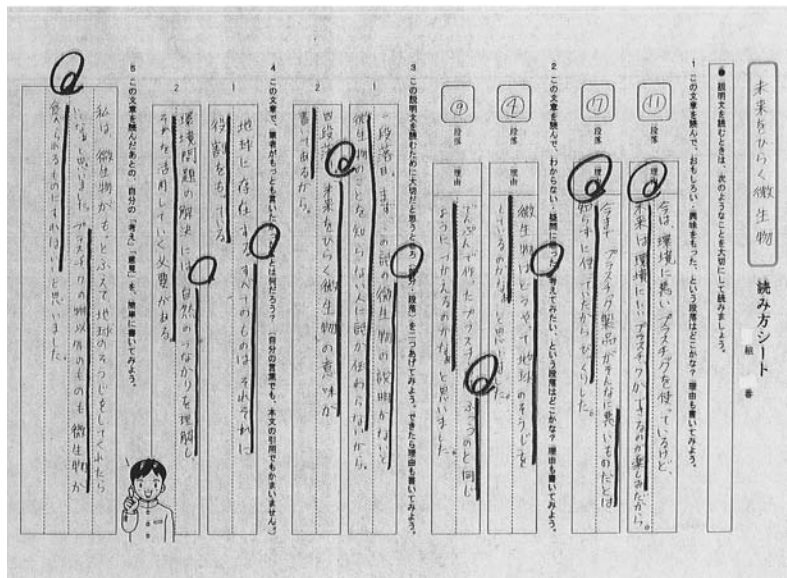
6 学習計画 (13時間完了) ……資料1を参照 (概略のみ, 「7」参照)

資料1 学習計画 (13時間完了)

5段階の学習過程		学習のポイント
習得	導入・基礎学習 〔2時間〕	・学びの楽しさ (興味・関心) と学習規律を学ぶ。 ・漢字や語彙の力、音読の技術について学ぶ。
	基本学習 〔5時間〕	・〈モデル〉となる教材文から、論理的なレポートの基本技術を学ぶ。 ・要約、キーワード、文章構成について学ぶ。 ・資料の解釈や選択、資料と文章の補充関係について学ぶ。
活用	応用・個性化学習 〔3時間〕	・〈モデル〉となる教材文から抽出した基本技術が習得されているか、論理的なレポートを記述することで活用をはかり、定着しているか確認する。 ・自分の立場や関心から、〈話題〉と〈主張〉からタイトルを決定し、論理的なレポートの基本技術を使い「書く」ことを行う。
	発信・交流学習 〔1.5時間〕	・レポートの基本技術を意識して、正確に豊かに読み解くこと、質問を考え、課題を指摘し、長所・短所について話し合う。
	評価・一般化学習 〔0.5時間〕	・他者のレポートから、自己のレポートの長所短所について振り返る。 ・学習したことが、次にどんな場面でいかせるかを考える。

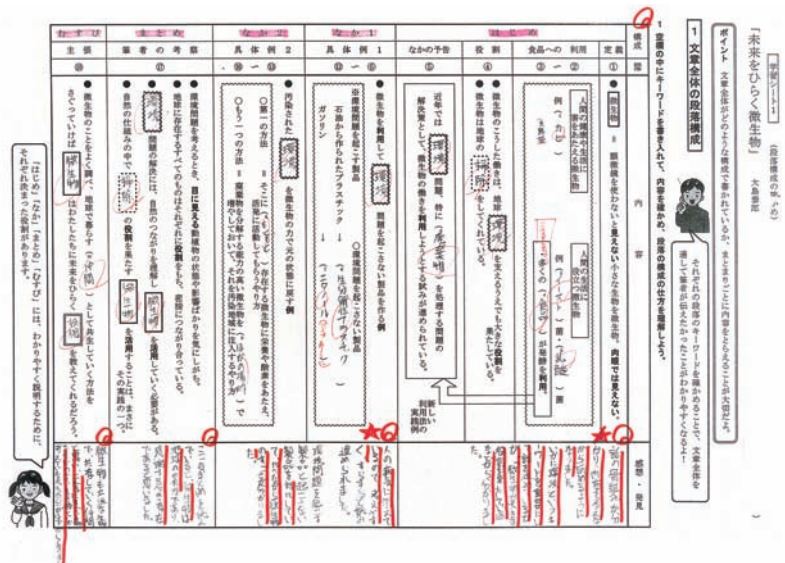
資料2 導入・基礎学習:「説明文読み方シート」
→教材への関心・疑問をもつ (自分の考え)
→説明文の読み方のポイント

※教材本文の範読の直後に記入。説明文の読み方の観点の習得状況の確認。主張の段落の理解。自分の考えをもたせるシート。



資料3 基本学習:「学習シート1」
→論理的な文章構成の型の理解
→主要なキーワードの確認
→「はじめ」の内容の確認

※文章全体の構成を確認し、キーワードを書き込む。「はじめ」と「まとめ」の論理的な一貫性を理解する。また、「はじめ」の書き出しの工夫についても、このシートで確認する。



資料4 基本学習：「学習シート2」

- 「まとめ（考察）」から、選択・構成された「なか（具体例）」の確認
- 主張・結論としての「むすび」の確認、「まとめ」とのつながり
- 説明文の要約の方法（一文章にキーセンテンス化）
- 「むすび（主張）」の一般化の述べ方の確認

※具体例「なか1・2」の内容が簡潔に述べてある一文章を抜き出し、要約する。具体例の記述の意味が、筆者の立場からまとめられていることがわかる（考察）。最後に、「むすび（主張）」で微生物の活用が、廃棄物の処理以外に、豊かな社会をつくるうえでも活用可能であることを一般化していることを確認する。

Handwritten student work for '資料4' showing analysis of a text about microorganisms. It includes a table with columns for '過去', '現在', '未来', and '主張', and various annotations in red and blue ink.

資料5 基本学習：「学習シート3」

- （「なか1」と「なか2」の説明の工夫）
- 「なか1」の具体例の工夫である対比や数値の確認
- 「なか2」の具体例の工夫である比喩の確認
- 筆者の問題意識やもの見方が比喩に表れてくることの確認

※「なか1」「なか2」で、筆者がどのように具体例を選択し、工夫して表現しているか、〈対比〉〈数値〉〈比喩〉という言語技術に焦点化し、〈対比〉については、キーワードとして取り出した。また、〈数値〉〈比喩〉については、話し合いの後、文章化したのち、発表させた。

Handwritten student work for '資料5' showing analysis of a text about microorganisms. It includes a table with columns for '対比', '数値', and '比喩', and various annotations in red and blue ink.

資料6-1 基本学習から活用へのステップ：

- 「学習シート4」（資料の選択）
- 資料選択の意味と有効性
- 文章と資料の補完関係
- 文章の〈話題〉や〈主張〉に適した資料の選択

※「なか2」の文章を引用し、この文章にふさわしい資料を考えさせた。多くの生徒は③と⑨を選んだ。そこで、二つのうちどちらがよりふさわしいかと議論させた。結果は③を選択した。根拠はこの文章の話題は「微生物」であり「薬品」ではないためと生徒は主張した。そこで、微生物という話題から再度、資料を選択する時間をとった。

Handwritten student work for '資料6-1' showing analysis of a text about microorganisms. It includes a table with columns for '話題' and '主張', and various annotations in red and blue ink. There are also images of petri dishes and a diagram of a cell.

資料6-2 基本学習から活用へのステップ：
「写真・イラスト・資料」
(情報提示支援)

※「学習シート4」と連携して使用した。生徒が実際に選択した資料は以下の通りである。

①	8	②	17	③	25
④	3	⑤	13	⑥	2
⑦	8	⑧	5	⑨	4

「未来をひらく微生物」
「微生物の活用」
「微生物の活用」をレポートせよ！
わたしの考える微生物の活用について、授業で学んだことや調べたこと、資料をどう使ったかをレポートしよう。

資料7 活用学習へのステップ：「調べ学習のてびき」

(受信から発信への段階学習)
→〈話題〉と〈主張〉の二つからなるタイトル
→教材から学んだレポートの基本技術からポイントを抽出
→基本技術の列記だけでは、レポートの記述が難しい生徒のため文例を記載

※レポートを書くにあたって、まず〈話題〉と〈主張〉からなるタイトルを考えさせた。〈話題〉に迷う生徒には、「説明文読み方シート」での初発の疑問や、「学習シート2」の下段(3)を参考にさせた。
※タイトルを考えるときに、〈主張〉を考えさせる。レポートを書くときにまとめ「むすび」に、〈主張〉の内容から書かせるためである。

「微生物の活用」をレポートせよ！
わたしの考える微生物の活用について、授業で学んだことや調べたこと、資料をどう使ったかをレポートしよう。

資料8 「生徒が書いたレポートのタイトル(抜粋)」

- 〈発酵食品〉 「チーズでおいしく元気！」「チーズを食べて健康元気！」「納豆で体を健康に」「納豆でおいしく元気に」「納豆で健康、きれいな毎日を」「納豆パワーで元気に！」「ヨーグルトでおいしく健康生活！」「ヨーグルトを食べて体の中から健康になろう。」「ヨーグルトを食べて毎日健康！」「発酵食品ヨーグルトでお腹から美しく！」
「パンの発酵の不思議」「日本の食文化 漬け物」「味噌で病気を予防しよう」「味噌で日本の味とお肌のきれいを守りましょう」
「アルコールで人々の生活を守る」「毎日食べている朝食で、毎日健康元気良く」「微生物の食品への利用」「発酵食品の持つ、良い点」「微生物を使ったいろんな食べもの」「発酵食品で元気で健康な毎日に！」「微生物の不思議発見」
- 〈バイオエタノール〉 「バイオエタノールをつかって安全な世界を」「バイオエタノールで排気ガス0を目指そう」「未来を担うバイオエタノール」
- 〈生分解性プラスチック〉 「生分解性プラスチックでダイオキシンをやっつけろ」「生分解性プラスチックを実用化せよ！」
- 〈抗生物質〉 「ワクチンで病気の予防を！」「ワクチンで安心な毎日を！」「抗生物質で病気をふきとばせ！」「カビからできた？ ペニシリン」
- 〈人体〉 「私たちの体にいる微生物が体を守ってくれる」「人体に住む微生物の働きとは？」
- 〈バイオトイレ〉 「微生物でトイレをきれいに」
- 〈微生物殺虫剤〉 「微生物殺虫剤で農薬なしの野菜へ」

資料9 活用学習：「レポート原稿」
 (自分の考えを一貫した論理で構成する)
 →レポート原稿の型

資料10 発信・交流学习：「評価シート」
 (レポートの相互交流・評価)
 →レポート記述の到達目標(評価基準)を焦点化し、系統的な自己学習(評価)能力を育てるステップとして活用

※2クラスのレポートをすべて印刷し配布。
 1時間は読み取る時間として設定し良い作品には付箋をつけさせた。次の時間に質問や評価について話し合いを行った後、良いと思ったレポート3点を選び評価とコメントを入れさせた。「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」の文章構成それぞれの観点をもとに、コメントを書くことで、到達目標(評価基準)の再確認を行っている。

資料11 評価・一般化学習：「振り返りシート」
 (学習の確認)
 →学習の目的(到達目標)の明確化
 →学習を振り返りを行い、メタ評価能力の確認
 →学習の振り返りから一般化
 (今後の学習でどのように生かせるか)

※大きく習得型学習と、活用型学習にかけて、自己の学習の振り返りを行う。レポートの基本技術として習得した内容が、レポート記述という活用でどのように生かされたか、振り返らせている。また、今回の学習が今後どのような場面で生かすことができるか一般化するためにも、自由記述の欄を設けた。

7 授業展開のポイント—指導の実際—

以下、ポイントのみを記載する。

(1) 学習シートの開発と生かし方

①情報理解の支援—全員に短時間でシンプルに—
「学習シート1～4」(資料3～6-1), 「写真・イラスト・資料」(資料6-2)。

文章構成・「考察・まとめ」と「具体例と展開・なか」の関係、具体例選択と構成・提示の工夫、筆者の主張(要約)・問題意識と資料の選択の関係について、短時間で効果的に教えることができた。

②論理的な構成・発信の指導、支援

「調べ学習のてびき」(資料7)で「話題と主張」の関係を意識してタイトルを考えさせた。

レポート作成にあたり生徒は「話題」を決めた後「主張」を予想し、その「主張」をもとに、まず「まとめ」「むすび」を記述させた。その後「なか」の具体例を書籍やインターネットから探させた。

今まで「書く」活動が苦手であった生徒も、全員楽しくレポート作成に取り組むことができていた。

③自己評価能力の育成—振り返りと課題の自覚—

「評価シート」(資料10), 「振り返りシート」(資料11)を提示したので生徒は評価の観点を意識しアドバイスや感想、自己評価の「質」が高まった。

(2) 5段階の学習過程—学びのステップ—

①導入・基礎技術(2時間)—習得—

導入では微生物クイズを行い発酵食品や食物連鎖についてのエピソードを話し、「微生物」への興味・関心を高めた。

教材範読の直後に「説明文読み方シート」(資料2)を記させた。自分の考えをもたせ、説明文の読み方の観点を習得状況、主張の段落の理解度を確認した。

記入後は語句の確認をし、音読を繰り返し、すらすらと読めるようにすることで、文章の内容をさらに生徒に定着させた。

②基本学習(5時間)—読み解く学習の習得—

学習シート1(資料3)で、全体の文章構成とキーワードの読み取り。

「はじめ」と「まとめ」の論理的な一貫性の理解、書き出しの工夫の理解等。段落ごとの内容を1枚のシートで文章全体を俯瞰させ、論理的な文章構成の型を理解させた。

学習シート2(資料4)。筆者の主張を「まとめ」と「むすび」の指摘から読み取る。

具体例「なか1・2」の内容が簡潔に述べてある一文を抜き出し要約。具体例の意味が、筆者の立場から意味づけられて(まとめ、考察)、微生物の活用が「むすび(主張)」の廃棄物の活用以外にも豊かな社会を創る上でも有効と「一般化」していることを確認した。

学習シート3(資料4)。「なか1」「なか2」で、筆

者がどのように具体例を選択し、工夫して表現しているかを〈対比〉〈数値〉〈比喩〉という言語技術に焦点化し読み取った。

学習シート4(資料5), 「写真・イラスト・資料」(資料6)。

説明に適した資料を選択する視点を身につける。「なか2」の文章を引用し、この文章にふさわしい資料を考えさせた。

③応用・個性化学習(3時間)—活用—

「調べ学習のてびき」(資料7)。

まず〈話題〉と〈主張〉からなるタイトルを考えさせた。〈話題〉で迷う生徒には「説明文読み方シート」(資料2)での初発の疑問や学習シート2の下段(3)を参考に考えさせた。

タイトルには〈主張〉をいれるようにさせた。レポートを書くときに「まとめ」「むすび」に〈主張〉の内容から書かせるためである。

タイトルを考え終わった段階で、「評価シート」(資料8)を配布し評価の観点を知らせ、論理的なレポートを書くうえで必要な力を確認した。

「レポート原稿」(資料9)は生徒が作成したレポート例である。

④発信・交流学习(1.5時間)—活用—

「評価シート」を使い、互いのレポートを読んで質問し合い、テーマの着眼点や表現の個性を評価しあった。指導したクラスの全レポートを印刷して配布した。

1時間は読み取る時間として設定し良い作品には付箋をつけさせた。次の時間に質問や評価について話し合いを行った後、良いと思ったレポート3点を選び「評価シート」に評価とコメントを入れさせた。

「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」の文章構成それぞれの観点をもとにコメントを書くことで到達目標(評価基準)の再確認を行った。

⑤評価・一般化学習(0.5時間)—振り返り—

「振り返りシート」(資料10)。

学習全体を通して、わかったこと・思ったこと、特に「習得型学習」と「活用型学習」にわけ自己の学習の振り返り。

レポート構成・評価の基本技術(習得)が、個々のレポート記述という活用場面でどのように生かされたか振り返らせた。

今回の学習が他教科・報告作成・話す聞く場面で生かすことができるかことを「一般化」するために「自由記述の欄」を設けた。

8 研究実践の考察—生徒達の変化—

(1) 学びの楽しさと達成感、友人の再発見

レポート交流会では生徒達は「あの子がこんな文章を書いたの」という驚きの声が続くもあがり、友人

の個性や思いを改めて再発見するという楽しい交流会になった。

「はじめ」では興味をひくことが大切、「なか」では身近な具体例を挙げること等、学習の観点・方法を意識した感想意見も多く、次はもっとわかりやすく書きたいと意欲をもった生徒が何名もいたことは実践の成果の一つである。

内容面では比較的調べるのが容易な「発酵食品」や教材に登場した「生分解性プラスチック」「バイオエタノール」を話題としてレポートを書く生徒が多かった。

一方「薬品」「人体」「バイオトイレ」「微生物殺虫剤」等を話題に選んだ生徒もいた。レポートを読むことで、微生物の多面性や現代社会・科学技術との関連等に対してより興味・関心を持ち「家でもインターネットで調べたよ」と報告する生徒もいた。

習得すべき内容を焦点化し「到達目標」を意識して発信・交流・評価を行うことで、効果的にレポートを書く学習を行うことができたためである。

(2) 〈活用・発信〉段階を見通した〈習得〉学習

自分の立場から解釈や意見を述べる「発信」型の学習をするために必要な力（到達目標）を明確にすることで（活用学習）、〈習得〉学習で生徒に身につけさせたい力が焦点化される。

「習得から活用」へという学びの段階を明確にすることは、生徒にとって到達目標がわかり意欲を持続しやすくなる、また教師が指導の過程や成果の診断・評価、改善が容易になる。

限られた時間数で公教育の学力保証責任を果たすためには、また学習者の学びを正しく診断し指導の改善に生かすためにも「活用力—構成・発信・評価」につながる言語技術を到達目標とすることが重要である。

(3) 段階的な指導過程—5段階の学びのステップ—

「導入・展開・まとめ」「一次・二次・三次・四次」という形式的な学習過程は、目標と評価・活動・指導と支援、学びの系統性の位置づけがわかりにくく、あれもこれもと学習活動が拡散してしまう問題がある。

本実践での「段階的な学びのステップとしての5段階の学習過程」では〈習得〉段階で基礎・基本の定着を重視し〈活用〉段階では〈習得〉したことを基盤にした「（構成）発信・交流評価」活動を行った。

(4) 学びの保証—学習シートの開発と生かし方—

限られた授業時間で〈習得〉すべき「到達目標」を全員に身につけさせることを考えた時、教えるべきことはきちんと教師が指導し定着させることがまず必要である。

そのためには、指導事項を系統的に整理し、生徒達に目に見える形で明示すること、単なる穴埋めではなく指導事項を効果的に学ばせるための「学習シートの開発と活用」が重要になってくる。

学習シートを開発することで、教師が意図した指導事項をもれなく〈習得〉することができるようになる。また生徒にとっても、学習事項が整理されていることで〈習得〉するべきことがらのはっきりする。

また、今回開発した学習シートには発問もシート内に記入してある。このことで学習障害の生徒が、何をすればいいのか聞き返したり、やることがわからずにただ座っているだけになったりすることもなかった⁽²⁰⁾。

おわりに

—情報を読み解く・論理的にレポート書き批評・討論できる学力（習得から活用へ）を育てる—

企業向けの雑誌特集では毎号のように、情報活用・読書技術、レポート作成やより良い対人関係を創るためのスキル（聞く話す、説得・説明力等）の特集が組まれている。

過日、大企業で新人研修担当の友人に再会した時も、優秀な成績で入社した社員が「正確に聞く力の基礎・基本（対人コミュニケーション能力も）が未熟」「論理的にレポート・調査報告書が書けない」「説得力ある引用や討論の組み立て等ができない」「鍛えられていないため打たれ弱い面もある」と業務内容研修以前の教育に苦勞しているとのことであった。学校は一体何を教えているのかとも問われた⁽¹⁻⁶⁾。

こうした学力と判断力・表現力の基礎・基本を、小中学校9年間（高校3年間）で「楽しい学び」として「系統的・段階的に」「全員の子ども達に」身につけさせることが必要不可欠である。

それは企業迎合等ではなく、子ども達の真に自分らしい自己実現や豊かな社会性・人間性の基盤となる言語力だからである。

本稿は、広義には戦後国語科教育観・授業観の改革という視点から、論理的な情報理解から説得力のある論述力（レポート作成、説明力等）の育成について、中学1年の説明文教材を例に実践的な提案を行ったものである。

新学習指導要領における習得・活用（探究）という方針（新指導要領の基になっている改正学校教育法のキーワード）を踏まえ、特に「国語科習得型学力（基礎・基本学習）」を重視しながら、実践では混乱の多い「国語科活用力」の指導と評価のありかたに焦点を当てて具体的な授業システムの開発を行った。

付 記

本稿は「第72回国語教育全国大会（日本国語教育学会主催、2009年8月3日～4日、筑波大学附属中学校）」での発表内容の骨子をまとめたものである。

本実践にあたっては、日本言語技術教育学会・名古屋

屋支部研究会会員、安城西中学校教諭の浅井奈美江・今泉陽子両氏のご協力を得た。記してお礼申し上げます。

なお、誌面の制約上、開発した学習シートや生徒の学びの経過、学会発表当日の質疑等の詳細は省略した。

注 記

- 1, 佐藤洋一「2008年改訂・日本の国語教育—国際化（欧米）スタンダードと日本のアイデンティティの行方—」（『愛知教育大学教育実践センター紀要 第12号』愛知教育大学, 2009, 3）
- 2, 同「これから求められる学力と国語科の指導—要約指導でまとめる力・聞く力を—」（『指導と評価 2009年10月号』図書文化, 2009, 10）
- 3, 同「求められる言語環境の整備, その条件」（『教育展望 2009年6月号』教育調査研究所, 2009, 6）
- 4, 同「『言語活動の充実』, 日常実践としてどう考え, どう実践したらよいか」〈『学校力を高める教育課程運営』所収, 教育開発研究所, 2009, 12）
- 5, 同「活用の学習内容・段階の明確化」（『教育科学国語教育 2008年10月号臨時増刊』明治図書 2008. 10）
- 6, 同「二つの『活用型』学力のステップを」（『教育科学国語教育 2009年2月号臨時増刊』明治図書 2009. 2）
- 7, 鈴木悟志「国語学力, PISA 型読解力の育成のための説明文の授業づくり—発信型の授業, 情報（テキスト）の熟考・評価, 活用—」（愛知県小中学校10年経験者研修資料 2007. 8. 6）
- 8, 伊藤清英「教材研究の在り方—情報リテラシー・コミュニケーションのモデルとして—」（愛知県小中学校10年経験者研修資料 2008. 7. 30）
- 9, 石田浩一「読みの技術を発信に結びつける—報告文『動物たちのコミュニケーション』を書こう—」（安城市—斉研修会提案資料 2007.6.21）
- 10, 佐藤洋一・尾崎和美「説明文を『正確に読み解く』学習から論理的な発信・交流へ—『イースター島にはなぜ森林がないのか』（小学校六年）を例に—」（『愛知教育大学教育実践総合センター紀要 第10号』2007. 2）
- 11, 佐藤洋一・野々山由佳「論理的で豊かな『聞く力』『話す力』を育てる国語科授業・評価の開発—『水の東西』（山崎正和）を中心に—」（『愛知教育大学研究報告第56輯（教育科学編）2007. 3）
- 12, 左近妙子「『習得』から『活用』のステップを明確に」（『教育科学国語教育 2009年2月号臨時増刊』明治図書 2009. 2）
- 13, 千崎晶美「読み解く学習から『論理的表現力』を」（『教育科学国語教育 2009年5月号臨時増刊』明治図書 2009. 5）
- 14, 兵藤伸彦「螺旋的・反復的繰り返しの重視」（『教育科学国語教育 2009年8月号臨時増刊』明治図書 2009. 8）
- 15, 日本微生物生態学会教育研究部会編著『微生物生態学入門—地球環境を支えるミクロの生物圏』（日科技連 2004. 9）
- 16, 坂本順司『微生物学—地球と健康を守る』（裳華房 2008. 5）
- 17, 今中忠行『微生物と共生しよう—パワフル微生物の応用』（ケイディーネオブック 2006. 12）
- 18, 松木尚美「習得から活用までを段階的に—『たんぼぼのちえ（光村・小二）を例に—』（『教育科学国語教育 2009年5月号臨時増刊』明治図書 2009. 5）
- 19, 石田浩一「写真・図と連携した説明文の読解」（『教育科学国語教育 2007年7月号』明治図書, 2007. 6）
- 20, 陰山江梨子「中学・高校における古典指導の開発」（『教育科学国語教育 2009年5月号臨時増刊』明治図書 2009. 5）

(2009年9月16日受理)